

住生活に対する学生の関心と知識について

— 住まいに関する語句認知の自己評価の分析 —

一 棟 宏 子
若 井 希水子

1. 本研究の背景と目的

近年、欠陥住宅やシックハウス問題、悪質業者によるリフォーム工事のトラブルなど、住宅に関する様々な消費者問題がマスメディアで大きくとりあげられるようになった。このような住まいのトラブル増加の一因として、住み手の住宅に関する知識の乏しさと、住まいの管理に対する関心の低さが指摘されている。

住宅取得に対する住み手の要求と熱意は強いにもかかわらず、住生活への関心と知識が低調である背景として、① 新建材・新工法など建設技術の開発や生活の洋風化が急速に進展したことで、従来、住み手に伝承されてきた住生活の知識や管理の習慣がもはや通用なくなり、専門家への依存傾向が強まったこと、② 工業化住宅、建売住宅、集合住宅の普及により「住宅の商品化」が進み、住み手とつくり手が顔の見えない関係へと変わって、住み手は主体的に住まいづくりに関わる機会が大幅に減っている。従来、地場産業であった住宅づくりは、商品化の進展により全国規模へと市場が拡大し、それに伴って、ハウスメーカーの巨大化が促進され、住み手は企業ブランドにより、アフターサービスや安心を期待したからである。

このように、業者への依存傾向がますます高まり、住み手は手間暇かかる住宅づくりから開放される一方で、それまで培ってきた住生活の伝統と住居管理のノウハウを失いつつある。しかし、住宅の品質確保促進法¹⁾、消費者契約法²⁾の施行、既存住宅評価システムの導入³⁾等は、今後、生活のあらゆる面において消費者の主体的選択と責任強化を促している。したがって、より良い住宅を選び、長持ちさせて快適に暮らせるかどうかは、居住者の意識に大きく関わってくる。

そこで、本研究はこれからの社会を担う学生を対象に調査を実施し、住生活に対する関心と知識の実態を把握、その問題点を考察することにより、これからの住教育の指針を得ることを目的としている。

2. 本研究の方法

2002年7月、住生活に対する学生の関心と知識の実態を把握するために、アンケート調査を実施した。調査対象の内訳は、女子大学（東大阪市）学生 311 人、共学の大学（東大阪市）学生 182 人、短期大学（松阪市）学生 94 人、専門学校（大阪市）学生 167 人であり、いずれも教員を通じて調査実施を依頼した。有効回答数は計 754 件、有効回答率は 99.5%であった。調査内容は、主に① 回答者の属性および家庭科の受講経験について ② 居住歴やメンテナンスの経験

について ③ 学生の住まいに対する関心と語句の知識の程度について、調査を行なった。

特に、今回の調査の中心課題は、学生の住まいに関する知識について、その実態をどう捉えるかであった。検討の結果、知識の実態を捉えるために、関連する語句をあげて、その語句をどの程度学生たちが理解しているかを自己評価してもらうこととした。

語句の抽出については、分野を次の3つに分けた。その中から高校家庭科教科書の住居領域から選択した語句のほか、社会的な問題として新聞等によく使われる語句、日常生活で使用すると思われる住宅材料や名称の語句を83語を選んだ。それらの語句の認知度は、① 具体的な内容まで知っている ② ある程度知っている ③ ことばだけ聞いたことがある ④ 全く知らない、の4段階とし、それぞれの語句について認知の程度を自己評価する形式をとった。また、分析を行なうために、上記①～④を段階別にそれぞれ5点、3点、1点、0点と換算し、認知度の点数化を試みた。なお、語句の一部については正解率を求め、自己評価がどの程度信頼できるかを確認することとした。

3. 結果および考察

3.1 回答者の概要

回答者の大学（専門学校を含む）別内訳を表1に示す。また、性別でみると、男性40.2%、

回答者の概要

	度数	パーセント
女子大生	311	41.2%
短大生	94	12.5%
共学大生	182	24.1%
専門学校生	167	22.1%
合計	754	100.0%

	度数	パーセント
男	303	40.2%
女	449	59.5%
無回答	2	0.3%
合計	754	100.0%

	度数	パーセント
核家族	311	41.2%
三世大家族	94	12.5%
その他	182	24.1%
無回答	167	22.1%
合計	754	100.0%

	度数	パーセント
10年未満	177	23.4%
10年～19年	250	33.2%
20年～29年	136	18.0%
30年～99年	100	13.3%
100年以上	9	1.2%
わからない	78	10.3%
無回答	4	0.5%
合計	754	100.0%

	度数	パーセント
一戸建て	668	88.8%
分譲マンション	142	18.9%
賃貸	282	37.5%
社宅	69	9.2%
その他	38	5.1%

	度数	パーセント
木造在来工法	435	62.4%
鉄骨造	183	19.8%
鉄筋コンクリート	252	36.2%
プレハブ・2×4	30	4.3%
その他	8	1.1%
わからない	201	28.8%

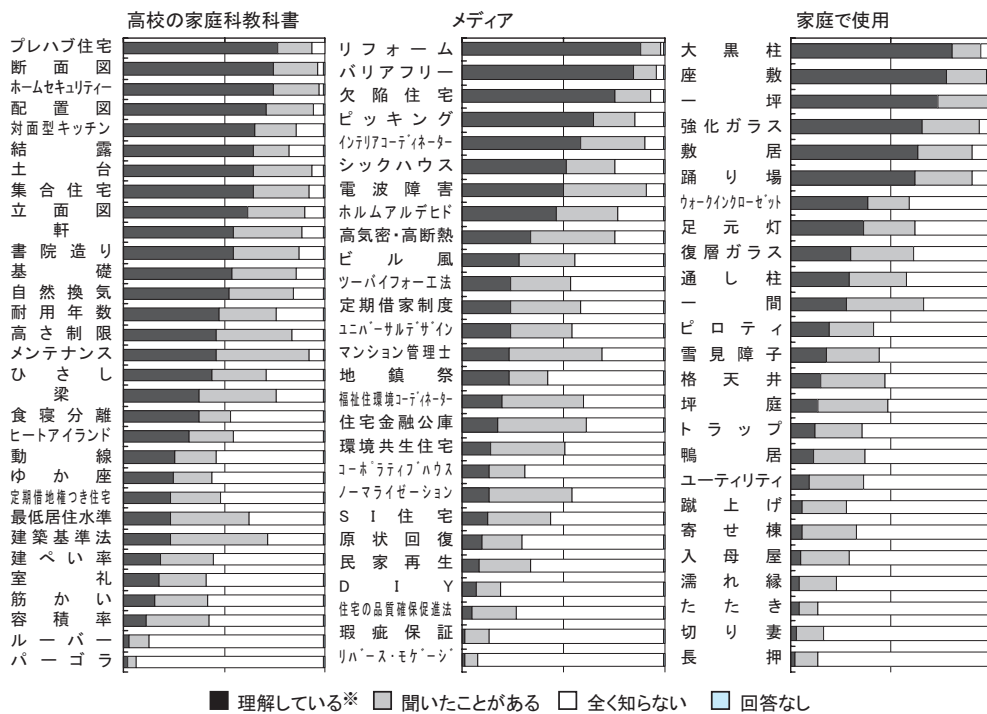
	度数	パーセント
新興住宅地	184	24.4%
古くからある	308	40.8%
両方混在する	257	34.1%
無回答	5	0.7%
合計	754	100.0%

	度数	パーセント
引越し	226	30.0%
改築	186	24.7%
どちらも有	219	29.0%
経験なし	120	15.9%
無回答	3	0.4%
合計	754	100.0%

女性 59.5%であった。家族構成は核家族の家庭が多く約 6 割、3 割が祖父または祖母との同居、三世代家族であった（表 2、表 3）。築 20 年までの住宅に住んでいる人が 6 割弱、20 年以上も 1/4 を占めている（表 4）。住んだことのある住宅の構造を複数回答で求めたところ、木造在来工法に約 6 割、鉄筋コンクリート造に約 4 割が住んだ経験があると答えた。プレハブ・ツーバイフォーは 4 % と非常に少ない（表 5、表 6）。居住地の状況は古くからある家が多い地域が 4 割、新しい住宅と混在している地域もあわせると 3/4 以上が、近辺に古い家がみられる地域に住んでいる（表 7）。引越しの経験は 6 割、新・改築は 5.5 割が経験している。住環境の変化を体験していないのは 15.9%であった（表 8）。

3.2 住居に関する語句の学生の認知傾向について

図 1 は、学生の語句の認知について全体的な傾向をみたものである。「具体的な内容まで知っている」と答えた人が全体の 50%を占めた語句は、バリアフリー（50.1%）のみであった。認



※「具体的な内容まで知っている」「ある程度まで知っている」を含む

図 1 語句の認知度

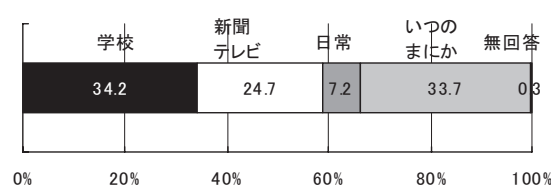


図 2 住居に関する言葉をどこで学んだか

知程度の幅を広げて「ある程度知っている」を加えても、5割以上の学生が認知している語句は83個中26個、約1/3にすぎない。学生の住生活に対する知識は限られている。3分野別に認知度をみると、家庭科教科書37%、メディアの分野28.6%、日常生活分野27.9%の順に得点比率が高い。それらのことばを主に学んだ場の回答を見ても、学校34.2%、新聞テレビ等24.7%、家庭7.2%と、認知度の順と一致する(図2)。「いつのまにか」が1/3を占めており、意識せず知識を得ている学生も多い。

教科書分野の上位の語句は、家庭科以外でも日常的に使用する語句や、ふだん目にしやすい語句が多い。他方、住宅の専門用語は下位を占める。メディアの分野では、リフォーム、バリアフリー、欠陥住宅など、報道で頻繁に取り上げられる語句は認知度が高く、語句の理解についても自信を持っている。日常生活分野では、屋根の名称(寄せ棟、入母屋、切妻)や、目にしにくくなった日本家屋の名称は認知度が低く、伝統が伝えられていない現状がうかがえる。

以上、認知度を自己評価で求めた結果について述べてきたが、これらのことばの中で、「建ぺい率」「ツーバイフォー工法」「座敷」と、屋根の形「切り妻」「寄せ棟」「入り母屋」について選択肢から正しい説明、もしくは図を選ぶ設問をした。「1間」の長さについては何cmに当たるのか、直接記入を求めた。「建ぺい率」「ツーバイフォー」は認知度よりも正解率が高く、「知っている」と答えた学生ほど正解率も高かった(図3)。一方、「座敷」の場合は、正解率が9割と

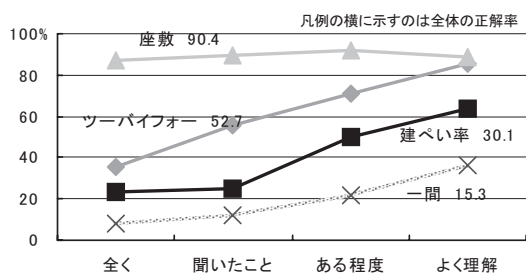


図3 認知度別に見た語句の正解率

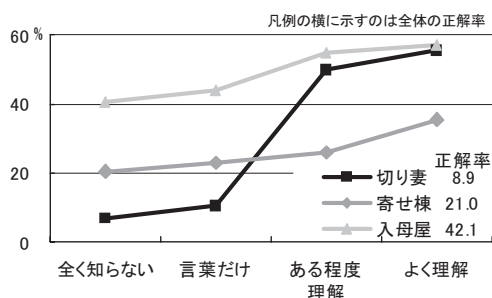
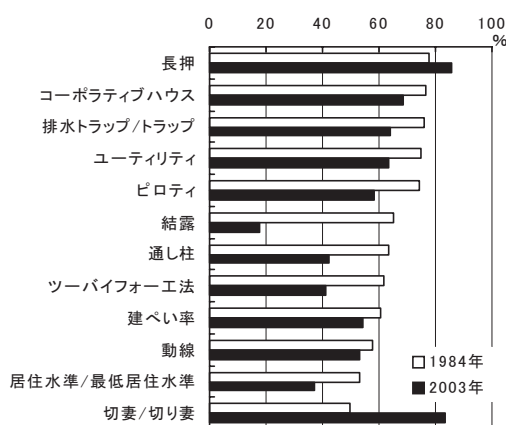
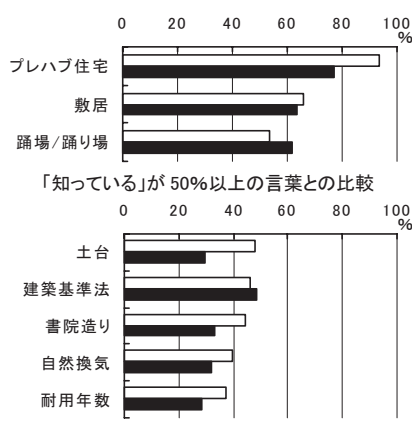


図4 認知度別にみた屋根の形の正解率



「知らない」が50%以上の言葉との比較



聞いたことがあるが多い言葉との比較

図5 1984年文献調査⁴⁾との比較

高く、認知度による差はほとんどない。これは座敷のイメージはできるものの、改めて教わることがないため、正しい理解をしているかどうか自信がもてないためと考えられる。屋根の名称では、「入母屋」の正解率がやや高いものの、「切り妻」「寄せ棟」の正解率は低い(図4)。なお、「1間」の長さについても正しく答えた者は少ない。

川崎衿子らによる研究文献「住居学習と住まいに関する語彙の理解度とその関係」⁴⁾では、住居学関連の授業を受講しようとする大学生724名を対象に、150の住まいに関する語句を家庭科検定教科書から抽出し、家庭科の学習歴の差とその理解度について報告している。この調査においても、住宅に関する専門用語の理解度が低い傾向が指摘されている。今回の調査と同じ語句は20個あった。文献調査は語句の認知度について50%以上であるかどうかを基準に、「よく知っている」語句、「知らない」が多い語句、それ以外の語句の3グループに分けて分析していたため、単純に比較することはできないが、「知らない」が多かった語句のグループでは、今回調査のほうが全体的に認知度は高まっている。中でも「結露」は広く一般に認知されてきたことがうかがえる。ただし長押、切り妻といった、名称を知らない学生が増えている。特に「切り妻」の認知度は大きく下がっている(図5)。プレハブ住宅については、今回は2割弱低下している。現在のプレハブ住宅の普及率を考えると、認識は高まっていると予想されるが、逆の結果となっている。

3.3 学生の条件別にみた認知傾向

1) 学校の種類別にみた認知傾向

学生の条件別に認知傾向がどう異なるかを、平均値の差で比較検討した。全体に、学校の種類ではさほど違いがみられなかった(図6)。詳細にみると、女子大(東大阪市)と短大(松阪市)では居住歴・居住地等のデータに違いは少ないが、短大の方が濡れ縁、座敷、格天井、雪見障子など伝統的な語句がよく認知されている。地域性が反映されたものと考えられる(表9)。

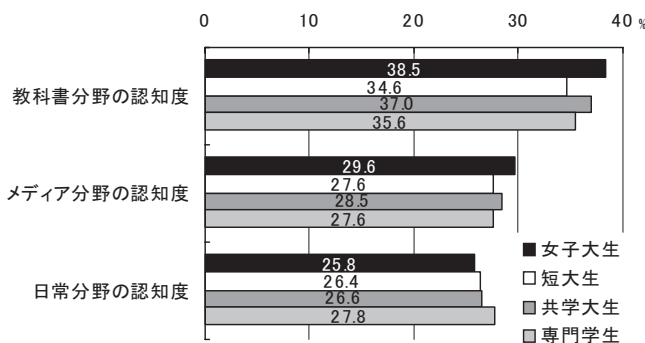


図6 分野ごとにみた学校別認知度

2) 男女別に見た認知傾向

認知度の平均点は女性が131.7、男性は126.6と、男性のほうがやや低い。認知度において男女の有意差のある語句のうち、女性のほうが認知度の高いことばでは、「食寝分離」「ゆか座」「動線」「配置図」「立面図」「書院造り」など家庭科の教科書で使われている語句が多い(23個)。女性のほうが住生活、中でも住み方に関する語句への関心が高いように見受けられる。逆に、男

性のほうが認知度の高い語句数は16個であり、それらは、構造やメディアでとりあげられる語句が多い(表10)。語句の正解率は、「切り妻屋根」以外は女性のほうが若干高い。男女の住居領域に関する学習歴は、平成5年より男女共修が始まり、中高とも大きな差はみられなかった。

3) 高校での住教育の有無別にみた認知傾向

高校で住教育を受けた学生は4割、学校の種類別に受講の有無をみたところ、女子大生がほぼ半数と最も学習率が高く、短大生が3割と最も低かった。住教育は地方により差がみられるようである。

高校で住教育を受けたかどうかは、語句の認知に影響を与えている(図8)。語句別に認知度をもても、教科書分野にとどまらず、認知得点が高い。特に建ぺい率、最低居住水準、動線、SI

表9 女子大生と短大生の認知度に差がみられた語句

有意差	女子大生(n=311)	短大生(n=94)
p<0.01	集合住宅 プレハブ住宅 結露 動線 書院造り ホームセキュリティ メンテナンス 建ぺい率 軒 定期借地権つき住宅 ヒートアイランド 配置図 シックハウス ホルムアルデヒド コーポラティブハウス 欠陥住宅 SI住宅 ピロティ 踊り場	食寝分離 室礼 住宅金融公庫 ユニバーサルデザイン ノーマライゼーション インテリアコーディネーター 濡れ縁 座敷 格天井 雪見障子
p<0.05		バリアフリー 長押 敷居
語句の数	19	13

表10 男女別で認知度に差がみられた語句

有意差	男性(n=303)	女性(n=449)
P<0.01	ホームセキュリティ 建築基準法 メンテナンス 基礎 ビル風 電波障害 ピッキング トラップ 蹴上げ ユーティリティ 強化ガラス 容積率	寝食分離 ゆか座 動線 定期借地権つき住宅 軒 室礼 対面型キッチン 配置図 立面図 ホルムアルデヒド シックハウス リフォーム 高気密・高断熱住宅 バリアフリー SI住宅 コーポラティブハウス ツーバイフォー工法 敷居 インテリアコーディネーター 座敷 雪見障子 ウォークインクローゼット ノーマライゼーション
P<0.05	高さ制限 瑕疵保証 住宅金融公庫 寄せ棟	書院造り ひさし
語句の数	16	25

表11 1984年調査で男女別で認知に差のみられた語句⁴⁾

	男子の方が認知の高い言葉		女子の方が認知の高い言葉
「知っている」が 男子50%以上 女子50%以下	JIS ルクス 天窓 し尿浄化槽 書院造り	「知っている」が 女子50%以上 男子50%以下	調理作業 展開図 納戸 踊場
「知らない」が 男子50%以下 女子50%以上	真壁構造 竣工 ツーバイフォー工法 切妻 寄せ棟	「知らない」が 女子50%以下 男子50%以上	動線 数寄屋造り 椅子式 家事室 就寝分離 L型配置 居間中心型 食寝分離 引き違い窓 続き間 天窓 FF暖房 テラスハウス 間仕切り 戸建住宅 タウンハウス
語句の数	10	語句の数	20

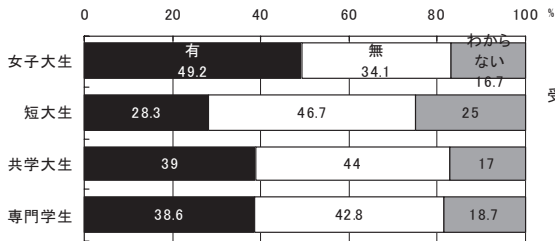


図7 家庭科で住教育を受けたか

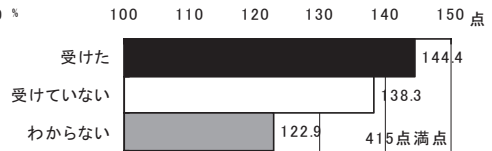


図8 高校での住教育の有無別にみた平均点の比較**

住宅、リバース・モゲージといった、住まいの専門用語の認知に有意差がみられた。

なお、先述した文献⁵⁾によれば、当時、男子の家庭科学習は小学校で85%、中学校で10%、高校で4%であり、他方、女子は96%が高校まで家庭科を学んでいる。住居領域を履修した男子は小学生時で47.6%、中学時1.9%、一方、女子は中学で78.7、高校で57.6%と大きな隔たりがあったことが報告され、それが男女の認知度の差に影響していると分析されている(表11)。

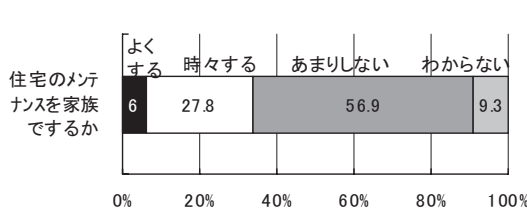


図9 メンテナンスの頻度別にみた平均の比較**

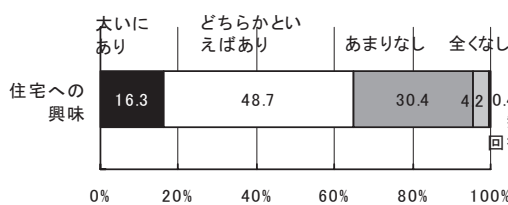
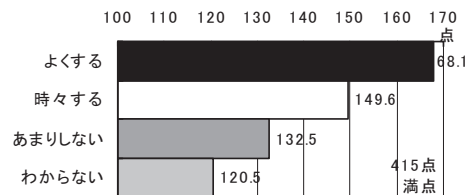
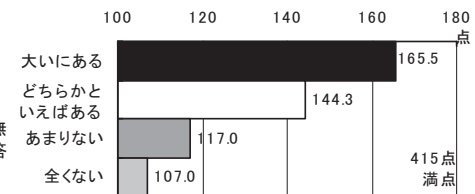


図10 住宅への興味別にみた平均の比較*



4) その他の条件別にみた認知傾向

日常生活において、地域の行事や慣習の伝承がなされているかどうかで、語句の認知に違いが生じるかどうかを検討した。家族構成(特に三世代家族であるかどうか)、古くから続いている居住地で伝統的な住宅が多い居住環境であるか比較を行ったが有意差が認められず、それらが語句の認知度に影響を与えているかどうかは、今回は検証できなかった。

家族でメンテナンスを「よくする」のは6%、「時々する」をあわせても3割弱で、住まいにあまり手をかけていないことがわかる。「よくする・時々する」「あまりしない・わからない」の2グループに分けT検定を行ったところ、メンテナンスを行なう家庭の学生は認知度が高い傾向が認められた(図9)。また、「住宅に興味がある」と答えた学生は、「大いにある」16.3%、「どちらかといえばあり」を含めると、2/3を占め、「興味がない」グループより、語句の認知度が高い結果が得られた(図10)。

4. まとめ

本研究は、学生の住生活に対する関心と知識の実態を把握し、その問題点を考察することにより、これからの住教育の指針を得ることを目的として、754人を対象にアンケート調査を実施した。

調査結果をみると、①全体に、学生の住まいに関する興味はさほど低くはないが、住まいに関する知識は低く、また漠然とした知識内容であるといわざるを得ない。②学生が住まいに興味を持っているかどうか、また、家庭で住宅のメンテナンスを行なっているかどうか、語句の認知度に影響している。③語句の認知度を平均点で比較すれば、男女差はないように見える。しかしながら、学生によく認知されている語句の傾向を詳細にみると、男女でやはり認知される語句にある程度の違いがあることがうかがえる。④居住地の影響を検討すると、新興住宅地か古くから開発されている居住地かどうかで検討したが、差は認められなかった。しかし、東大阪市に位置する女子大と松阪市に位置する短大を比較した場合、短大生では伝統的な住宅様式に関連する語群の認知度が高く、居住地を大きく捉えた地方差といったものが見受けられる。⑤語句の知識をどこで学んだかは、「家庭科の教科」をあげる学生と「いつのまにか」と答えた学生がほぼ1/3ずつを占めている。住教育の効果も一定程度認めることができる。なお、中高の教科でとりあげられる語句は、日常会話でも使用されるものが多く、社会生活との関係も深いため、生活上の知識として「いつのまにか」身についていると考えられる。従って、よく知られている語句については学習歴の差や男女差は少なく、それらに明確な差はみられなかった。

今後は、社会的にみて全体に住宅への関心が強く、DIYが盛んで、自分でもメンテナンスに携わる機会が多いオーストラリアにおいて、同様な調査を試み、学生の認知度とそれに対する中等教育の教科の影響を把握するとともに、日本で得られた結果と比較検討する予定で、現在研究を進めている。

注記

- 1) 2000年4月施行。品確法と略される。新築住宅を対象に、良質な住宅を安心して取得できる環境づくりをめざした法律で、①10年の瑕疵保証期間の義務づけ、②性能表示制度（任意）の導入、③住宅関連紛争の迅速解決をはかることを主目的としている。
- 2) 2001年4月施行。消費者と事業者との間にある情報の質、量、交渉力の格差が原因で、対等な取引が行われず、消費者が不利益を被ってしまうことがないように、あらゆる消費者契約に対応した最低限のルールを定め、消費者の利益を擁護し、国民生活の安定向上と国民経済の健全な発展を促すことを目的とした法律。
- 3) 2002年8月実施。既存住宅の現状を主に目視により、不具合の有無や劣化状況等を調査し評価書を渡す。
- 4) 川崎裕子、大井絢子、浅見雅子、林知子：住居学習と住まいに関する語彙の理解度とその関係、家政学雑誌 vol. 36, No. 12, p.p. 967-972 (1985)
- 5) 同上